





晉其角序

能譜乃集つる事古今より
わらりては道れおとて起通
き時たれや幻術の事一也
しつるれ白り魂る入と道
とゆえよ極めこもに似ま
海一久一一世よまら
もくんようわてる愛れ家

正

辰

吹中一ノ葉ハ浅妻の草のり

落身ノ草ノ葉ノ年ノりノ此の雨

又雨を妻の座の浮りノ此の雨

○

鶯の羽をノ草ノ葉ノ此の雨

名風君のかこいれや年ノ此の雨

月ノ草ノ葉ノ此の雨

下毛開根舟

右

原石

を志し五徳のつらなる
心なるをいひ通すいなり
こたなり彼ありと人代骨り
てんを作ししと詳いれ
るる笛を吹かすになん結る
と申されたる人よ成て結連
ぬるも五の詳のしと結る家は
及魂乃法れをあらうこのよ結ふ

心は通したまりるれ入る
しアイウエシよりくひりさく
いふれし吟詳いもあめ過
し只能階も魂れ入る詳
しころとして我翁行脚乃る
字加書越ししもの山中い
後し小養を看せし能階
乃神をいふしと今れをた

しんまゝに新賜のむらゝんを呼
ひも神ありに懼る人まゝの
術なりしを元よりし
集るとつらよと様とのい名
付しは道あり是より去る
てんをとり魂を合せし去来
元兆乃ほりありたのよやうせ
書

元禄辛未歳五月下弦

雲竹書

猿蓑集卷之一

冬

初一我猿を小蓑をほろけ也 芭蕉

あまのけりを時ふまの夜其終の 其角

時ふまをまのけりも新少子 千那

幾人か一我のぬく物向の橋 僧 丈艸

鏡持の形振ふるも一とまに 膳所 正秀

廣深やしらり時ふる沼を良 史邦

舟人よめりてさしつゝ可なり 尚白

伊賀の境より

やうや奈良の隣乃一馬由 曾良

時や早本つじ屋の窓あり 元北

了りて竹田の里やちし我 乙羽

くぬまされ早あや小夜時ぬ 羽紅

新田は稗穀屋ししき 昌房

いりしや沖の河ぬは其帆片帆 去来

しつあまのちや北に代早のあ 百歳

いりの動く地なきを我ぬれ 野水

流より

しつあまのちや北に代早のあ 其角

歸りぬるれよもちん送切し 同

禪もて去のる屋や神は月 元北

百舌るあわすゆりれ松よ十月 嵐蘭

のりしや頬腫痛む人女影 芭蕉

かよひを延びたつものをもよひ

元兆

よのよのよ

梓の原のこもりの花も枯れ

土芳

流杯をやらせて過す十絶句

裾道

ちやのこもりの花も枯れ

越人

よのよのよ

猿錐

古ちの貴子も事ごとく

元兆

菊の葉田小葉拾をよひ

雑水のおもひなりて冬ともり

其角

ころもきと牡丹のこもりの裸

車来

草津

あじさいのこもりの花も

尚白

神速水のこもりの花も

珍碩

霜月朔旦

梧まららふよ物あり

良品

水き月たれを新しや也

不王

羽扇

伊賀

伊賀

伊賀

膳所

伊賀

背門に乃入はよのほつちり
いし道々雪よまよきて鳴千尋
矢田のゆや浦のあらねのちる
筏たれんへる跡や鷺のち
水底をうらてまゝ魚の小鴨
るんも寢入るわら余吾の海
死まへ採成らん鷹はんか
襟をうり首引入る冬れ月
文州 本節 路通 貝葉 秋風

とあるや鎖のまわて冬れ月 其角
かゝるに浦園くらやみの隈 長崎 暮年
又やまゝ旅人さし 石部山 大津尼 智月
翁は御れかき衣をまへ
らゝ記あり略々
首をうりつるまゝやけ衣 義濃 竹戸

題竹戸之衣

魚のけ袴乃やうせがと水外 探元
魚のけ我のまけあゝ紙衣 曾良

志のこころに教珠もあらず 雁袋 史邦

伊白砂は候す

膝つゝよのこまらり居る 霰の 史邦

桜摘のそよぐ教は狂ふあり 野童

鶺鴒乃鴉らりこぼす 霰の 伊賀 不峰

呼ぶと射賣つらんぬあられ 凡兆

こころれ清くきりや朝飯のそよぐ 膳所 晝好

しつちや肉は居たりぬ人へ 其角

初音よ響部屋のうく 朝朗 史邦

そわやりのこころ吹くや 羽紅

つゝもりの凡そ 探丸

下京やちつじとほ 夜丸 凡兆

なまのこころ一筋やちつじの原 同

信濃路を

ちつじや植屋は 芭蕉

草庵の留

養老の屋もあひの巻れを

其角

高れ目ハ竹の子さうはさうさ

尾張羽立

許よも健あふさうれん

長崎卯七

しらけりてちやを喰ひて

去来

青亜追悼

乳のこみに世を海も師走

尚白

うももえ也の度とされ内

芭蕉

鈴の記懐ハ顔は似ぬとも

乙卯

一月ハあまもあてしらへ

文州

住吉奉納

一夜神もや鼻息白一面の内

其角

節季候よ又のこも事し

伊賀須琢

あやこらへも

同祐甫

乙卯 新宅

くの家をさうさうの卒忘

芭蕉

弱法師の家門ゆせ餅のれ

其角

歳の夜や曾祖文をゆげふ多枕 長和
 けす望れし空のちやうの香 去来
 くらまてち多娘まうけや何れ 同
 大とちやまはたき持しんくまら 羽紅
 やららねく又やましくり義の香 其角
 い孫もくふいしんしつ年れ暮 路通
 年のとれ破も襦袢幾くまら 松風

猿蓑集卷之二

夏

有明の面をくまらにまら 其角
 夏すしん目もくちあや時鳥 木節
 ねまを様よのしんくまらにまら 芭蕉
 時鳥くまらしんくまらにまら 尚白
 けくまらにまらしんくまらにまら 凡兆
 しんくまらにまらしんくまらにまら 智月

蜀魂たぐや木のつれ角樽 史邦

入おれしきよの中もにきき 羽紅

ほろよほろよりかみのちのれ 文州

ふかき代官後やほろよき 去来

こいねと我塚てあけちよよ次 奥刃遊女

松崎一見の所中もあつちや
病の毛衣とあちちれ

去鴻や露よ身をくれほろよ次 曾良

ふもいぬをほろよかきせよかんとも 芭蕉

旅館庭でさうく
庭草をこえんす

あつねあつちよよあつちより 膳所
曲水

四月八日詣慈母墓

あつちよろろろろろろろろ 其角

あつちよろろろろろろろろ 全峯江戸

別僧

ちよろろろろろろろろろろ 越人

あつちよろろろろろろろろ 琢碩

翁は知られてすまあし
しりて

亡人

似合しきけのこもはな里 杜國

喜んばもむけりけのま 嵐蘭

井すきしゆく清し 杜り 半残

起ぬくゆまもあはれ
朝の向乃

起くのこもはな里 仙化

題去来之塔峨洛柿舎有

高極の如く本舎屋を名はに 九兆

破垣やわしき麻子たがし道 曾良

南都旅店

誰のこもはな里 千那

洗濯やもあしき 尾張 薄芝

豊國よて

竹の子たかき 九兆

ふけのち子や白濁し 去来

たけのこや稚まゆの猪たし 芭蕉

猪の吹入さうさうしれ
正秀

明石夜泊

踏まやしらぬも雪かま月
芭蕉

君が代や魂摩奈を鍋一
越人

五月三日

しるし

包の膏いと並くわけ高浦水
其角

粽はふかひもよまむ額髪
芭蕉

隈藻の廣をふらへ餅粽
岩翁

さひきたる客人やよまらけり
尚白

五月六日大坂より死の

遠忌を吊しけり

大坂や刀ぬれ身乃み十夜
蝉吟

作賀

真茹の館よ

其草や兵九さけ先乃跡
芭蕉

這出よわい屋下大蟻の跡
同

け境いひしり

こりの事

かつかり角かりけり浪の石
同

五月あゝ家あり控りありと
凡兆

ひねまの味なもやあり
木節

了との謂ひありと
史邦

奥羽名取の郡よく申ゆまの
の塚ハつとくもやと存ちま

道より一里すくありたり乃方
笠物といふもよまるとま

ちりといふもよまるとま
ちりといふもよまるとま

笠物といふもよまるとま
芭蕉

大和紀傳のさしとあり
て往來の形れをさしとあり

すめちりもハ料はつとま
紙のつとに書つてあり

つとちりもさしとあり
去來

笠物といふもよまるとま
凡兆

目の道や茶館くさ月あり
芭蕉

笠物といふもよまるとま
羽紅

七十余の老醫みまあり
中子んころりてなつとま
にいふのむをけつとま
いさつとま
る人よあつとま
おつとま

けし年よころといふとこか
ゆのさうりり

六月の力や五月あえ 其角

百姓も妻よ取つく茶摘可 去来

志し茶山よめぬれ 正秀

つみ合子あけや妻白鳥 游力

孫と愛し

妻を余の家しやらん雨蛙 智月

よまよきて體迄冷よ山や歌部 花紅

志し川の関

河流のしや奥の田拙し 芭蕉

出羽のつねとあそび

眉掃をと面影よして死粉のふ 同

法隆寺南帳
南無佛のた子を拜す

衣袴のしきなりし粉のふ 千那

田の畝の豆つらみち 伊賀 万宇

膳所曲水之樓

螢火や吹さらけまじりて 螢のやと 去来

蛸田乃螢乃二句

闇の夜や子を泣かす螢のや 九兆

しほしほや船影酔てはつれ 芭蕉

三絶野へ流るる時

螢火やこゝろうろもは 鬼尾谷 田上尼

あしきらよ 粉よ 下あふいぬ 尚白

草むしや百合の中へ しのの 半残

病後

かつちやのしほしほ 百合のよ 何処

すしやあつちやのよ 百合のよ 乙卯

残蚊辞を作して

子やなん其子の母を蚊の咬む 嵐蘭

餞別

ちよとちよや蚊屋のしほしほ 蚊の宿 膳所 里東

しほしほ 蚊の宿 膳所 里東

みーの夜よと昔の冠者よふれお 其角

障のや蚕のまきゆ耳乃る宛 文州

下等や地味なうけ蝉のそ 嵐雪

客よりや指交のゆるの勢 探志

ねくぬぬうらまらんとす野のそ 芭蕉

表とや音麻州とあめのは 槐市

流のぬく深のたのうく流哉 九北

舟引の書け唱弁の合歡の花 于那

白雨や鐘よりとつも日れのみ 史邦

素堂之蓮池邊

白るや蓮一枝の拾りてま 嵐蘭

日焼田やほくくつと鳴く蛙 乙卯

日乃暑と鹽の池の蟻ウツカくれ 九北

水を月と鼻のよとあつと殺き金 同

日の曇やこりねく暑と牛村台 正秀

ふく暑く蘇よれ後のそ原 本節

志らんゝの較ゆへにうあしはし

野童

のりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

羽紅

青草の湯入ふゝゝゝゝゝゝゝゝ

巴山

千子の

のりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のりゝゝ

中ゝゝゝゝのりゝゝ神を今や青南干

芭蕉

水ゝゝゝゝのりゝゝ朝ゝゝゝゝゝゝゝゝ

嵐蘭

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

宗次

すゝゝゝゝのりゝゝ朝ゝゝゝゝゝゝ

元就

辰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

千那

月録や四ん乃彩純為粧

曾良

夕ゝゝゝゝのりゝゝ並ゝゝゝゝゝゝ

去来

のりゝゝゝゝ

やゝゝゝゝのりゝゝ今のは比叡ゝ似ゝ物

之道

大坂

猿蓑集卷之三

妹

花月や蓮花らうらな花一

不知
讀人

此句東武くちき

素堂

かひくちあめけおの齒也秋の風 秋風

色蕉屋よ何よおれや妹の風 路通

人よ似く妹のまゝと細話のそ 珍願

加賀乃全昌きに宿す

終夜枯のきくやまのこ 曾良

戸原や野鳥の寝ぬおを輝の風 山門

あまのやのや鬱合留れ枯のけ 凡兆

しん露や枯の所さの起あらし 去来

大比叡やしほぬお草のやめさの 野童

と葉らりて跡とあねまや桐の露 凡兆

交目や六りもやみの夜よ似す 芭蕉

合歡のよれなうらまゝ合あけ 同

七のやあよりいふくはるぬへし 杜若

伊賀小舟

こがのの信しりり相撲取 去来

伊賀

朝のうらろ寝るあらしわし 風姿

膳所

舞やめこの夢たけはます 及肩

笑のの泣かそよそはま権のれ 嵐蘭

ま草無くせくそり木槿か 秋風

ふり花流しそわしむられ 千那

。よりのゆくはあまきや坂巖雨 史邦

そよや藪の田より卯あじ 豊稔

枯草やよのさびるうきうきす 子尹 ^{三川}

迷い子の親あつらやすきま 羽紅

八咫おりに遊びして榮
うりの文きけの序るまよ

まよきく揚乃えんけ為るれ 元兆

つらつらりくちかきしんこ
いふらそおせにあて

思ふよのさるるあしきれ為 素来

草刈よろけ白雲り三枝の露 李由 ^{平田}

え禄二年翁は伏せしきそ
こころのくまのこ越後よかり
け柳しきまよかの園よて
いふらりゆりていせまてえ
をばらるる

いつくまうたかれ跡も秋の更 曾良

桐のよにうらぶるの堀の内 芭蕉

百舌鳥あこや入日さう 女松系 元兆

初序よち終るまよ 梧 ^{亡人}

加茂よ詩をよみ涙のこぼれ

あの人のかのよくの

あつたてしよつとあつた

月歌や拍子もろく膝の上 史邦

友近の六條よあつちうちうち

あつちうちうちうち

伊賀

影やうたふさふさ朝日夜 卓袋

しやんをちやんしよの歌 乙羽

京筑紫をすれ月ら 宿中者 丈艸

月影の相もあつた月一う 乙羽

あつちうちうちうちの歌 尚白

向の籠をちやんしよの歌 曾良

え禄二年つとつた徳あり

月をさつて氣比の相あつた

あつちうちうちのあつた

月清く照ちのしよの歌 芭蕉

仲森の初室猶子を送る歌

うさ夜の月をさつてあつちうちの歌 去来

膳所

明月やちやんしよの茶はあつた 昌房

月入るる人の破さう

阿紀

僧正のいよよの小屋れあめ

尚白

和瀬や鳴つのはの飛舟

凡兆

一戸やえのやうこましく

去来

稗の極たる遊

越人

流糟やわゆるの食より荒島

正秀

あやまりてきこうせいの鑪

嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物のきりりたり葉よ

凡兆

しつしき指のふりり

曾良

旅枕庵のつと合軒下

子^{江戸}里

鳩やう流杯あめ蕎麦島

琢碩

とちや下るるや梅のた

凡兆

鑄釣はのるし鱈つり

半残

わあ間のしす梅らるる

尚白

葉を切る跡まじり

其角

うさよに鶉ヒナの鳴き声はしらべれ 珠碩

ふゆのやまのこころは梅の秋 土芳

稲うゝ母よ出逢ぬうさよ 凡兆

自題落柿舎

梅のや折らちもあはれし 去来

志の原やゆゝの梅のしらべ 塵生賀易小松

朧をひ竹切のうさよ 凡兆

神田みよ

まはるうららの梅のしらべ

我白妻の敲うら音 數足

梅よまゝあはれ ありし

花すもい大名をまらるる 嵐雪

しぬの四五日弱るすまは 文州

まはる梅のうさよ 凡兆

世の中ハ鶉鶴のうさよ 同

培臭の歯よこころは梅の香 荷分

猿蓑集卷之四

春

梅咲て人の怒乃悔もあり

露沾

上臈の山莊よりしるし
候しせりて

梅より山路狹くはなれり

去来

しん香や久入異半の角

加賀
白空

庭真

梅の香も砂利も流す谷は真

土芳

一歩一歩と歩くと
風鈴の音も
あつた

夢さして又一句のやもほの梅 嵐蘭
百八のいひはさかや園のしめ 其角
ひらり寝の能く宿るしん子日 去來
野田や厚路のつく摘る葉 史邦
くつやちやふ漕するあま私 嵐蘭
五月月あよあつたよこ中 如行

憶翁之客中

裾りて草をよつとちん草枕 嵐雪
つとつと踏身あもさあるあ 路通
七種や跡より朝しらす 其角
家やちを寝のよけ根芥也 丈艸
うすうすやちのさるる存あふ 其角
脈ふ去れくらきに日あられ 同
鈴ふさふさあふとあれハ揺あり 去來
鶯のちを踏ますす垣植られ 一桐

伊賀

雪やしらぬ一みりたきしりふ 江戸 漢石

うらふやを詠めし礼へし 其角

鶯や下駄の齒よりく小田代上 凡兆

雪や窓よえちとていんあう 伊賀 魚日

やぬのちを柳よりいす 江戸 探丸

けろいさりの持へき柳へれ 江戸 ト宅

垣うらとてしれ丁柳 江戸 遠水

よこいへ極変れは柳へれ 尚白

音柳のちをれや鯉の住所 伊賀 一啖

雪やけや鈴いす場乃す 同 木白

待中乃正月もいやうら月 揚水

回カ照よとして

雪やしらぬ 芭蕉 精の事あ

うらふ 越人 切時稿の意

うらふ 去来 移りぬる

雪路沾がうて餘寒の當座

彼岸すへとむきよ一夜におゆ 路通

まのしりや常事ありとて涅槃像 野水

花並ぬ裏ハ燕乃かろい道 九兆

まよつゝ今や紀の戸いよの戸 伊賀 沢維

春ぬや屏風のふ草ふ花咲ぬ 嵐虎

ふしよふかして

よるや山よりゆるる門 猿維

不惟と金かき起し道一春のぬ 芭蕉

春ぬや田舎のふれ雛賣 史邦

しるゝのあゝや軒よあは 羽紅

泥ぬや田舎女の睡つゝん 史邦

蜂こゝろ木を舞の竹や虫の糞 昌房

振るや下座よりまきち雛 去来

鳥のいすれ雛のつる雛のふ 伊賀 萩子

桃柳さらりありとてまきんあは子 羽紅

ふれま境ふのしるゝぬ 三川 鳥巢

ふれま境ふのしるゝぬ

畫譜

山吹や夕日の焙餅は白く時

芭蕉

白玉やあまのつづく枝りれ

車来

ちりちりちりちりちりちり
あちちりの髪りつらんもあ
ちりちりちりちり

羽井カキもろくを昔やちらり枝

羽紅

鶯あしよりささるる枝り

坂上氏

津國山本

けしきよの笠はさしはる枝り

芭蕉

しらしらしらしらしらしら

伊賀
利雪

東叡よあまの

小坊まやまのあまの

其角

一枝のやあまの

尚白

雛のあまの

九兆

まきのようちり枝り

丈艸

馬明のようちり枝り

史邦

赤斎のようちり枝り

千那

葛城のゆきをこぼさず

ねんじりあまの湯けし神の顔 色蕉

いりの國を垣のなはりのつゝ
あはれ乃ハ守福大新よ附
らまこころと云傳へるとるを
死し

一里ハこれ花亭のふ縁下 同

云々の墓東武谷中にありに
三歳して死れ九年の及ふの
城よりふらぬ墓のあは福徳を
けりしりかひく母姑ゆきこと
ついでにうれ福をたつて後々よ
他の墓にともてけりしれはまを

まうやうやう吸ふ野の往還 園風

知人よあはれしとありんれ 去来

あは僧の嬉りしあは熱れ 凡北

浪人のやうき

嵐をそよめ夜あはれうら花鞍 半残

照きしれをち地ゆへ外 長眉

しれ奥の奥
しれ奥の奥

大考やうしれ奥乃あは果 曾良

道灌山よのけしき

る滝やみさきのびをひらけ 嵐蘭

源氏の強をさかん

標子に夜ちるふれまよりの 羽紅

庚午の歳家を焼く

後よりりしきまの夜はらりし 北枝

しれりや伽藍の樞や 凡兆

海棠のしきと満より夜の月 普船

大和の脚り

草師くちり 芭蕉

山や躑躅ふけ 探丸

やうー海よらん 智月

兔角して 山川

鷗鳥の 式之

木曾塚

真夏の石 乙羽

梅上

三三

春風を待たぬわが殿の堂を乾 曾良

望湖水惜春

けしきをよむ人のやとらふ 芭蕉



七

